2001年（平成13年）3月10日発行　第251号　（昭和５９年１０月１日第三種郵便物認可）

教皇様の聲 3 251号

Libreria Editrice Vaticana,Citta del Vaticanoの転載許可済 2001

もう一度キリストから始めよう

〔ご公現の祝日、教皇様は大聖年の扉を閉じ、聖ペトロ広場でミサを行った。〕

1　「すべての民は主に仕える。」答唱詩編からのこの歓呼の声は、主のご公現を祝う本日の荘厳な式の意味をよく表しています。また、大聖年の扉を閉める今日の式についても光を投げかけます。

「すべての民は主に仕える。」この言葉は私たちに未来の光景を語り、もっと遠くを眺めるように促しています。また救世主についての古代の預言を喚起するものがあります。古代の預言は、世の終わりに栄光に包まれて救い主キリストが戻って来られるとき、完全に実現するでしょう。しかしながら、最初の預言はすでに実現しています。それは歴史的でもあり預言的でもありますが、三人の博士が捧げ物を携えてベツレヘムへやって来たとき実現したものです。こうしてキリストは初めて人々の前に示されることとなりました。まさにキリストの「ご公現」です。キリストは世界の人々を代表するこの博士たちの前に示されたのでした。

これは時の流れと共に徐々に実現される預言です。福音の教えが人々の心にしみ渡り、世界のあらゆる場所に植え付けられるにつれて実現されていきます。大聖年は「ご公現」のようであったと言えるのではないでしょうか。ここローマにやって来ることによって、また大聖年に指定された各地の教会を巡礼することによって、多くの人々がある意味イエスを求める博士たちの足跡をたどったと言えます。大聖年の扉は、イエスとの出会いを示す単なるシンボルにすぎません。キリストこそ本物の「聖なる扉」なのです。私たちが御父の家へ入ることができるよう、そして神的な生活という神との親しい付き合いに導き入れてくださるのもキリストです。

全時代を通して永遠に現存するキリストの栄光と力

2　「すべての民は主に仕える。」カトリックの中心であるここローマは特に、全大陸から巡礼者が絶え間なくあふれ、キリストへ向かう世界の人々の旅路という生き生きとした姿を見せてくれました。キリストの御顔を眺め、そのあわれみを得たいと望むあらゆる人々が訪れたのです。

「キリストは昨日と今日、初めと終わり、アルファとオメガ、時間も永遠も彼のもの、栄光と支配は彼に世々とこしえに。」（復活徹夜祭の典礼）そうです。これは大聖年がキリストのもとまで上げられたいと望む賛歌です。大聖年は新しい千年期への変わり目という、私たちを目覚めさせる年でした。キリストは2000年前にお生まれになった歴史の主です。今日この素晴らしい年は、表向き終わりとなります。しかし、大聖年に注がれた霊的な賜物は残されたままです。これからも続く偉大な「主の恵みの年」は、キリストがナザレの神殿でお始めになったことですが、世の終わりまで続くでしょう。

「キリストの象徴」である大聖年の扉は今日閉じられますが、イエスの聖心はかつてないほど大きく開かれています。イエスは希望と意味を必要とする人間に語り続けます。「疲れた者、重荷を担う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。」（マタイ11・28）大聖年に固有なたくさんの式典や様々なイニシアティブはさておき、大聖年が残してくれた遺産は、「キリストと出会う」という生き生きとした慰めに満ちた体験でした。

3　（･･･）主は私たちに素晴らしいことをなさいました。そのあわれみで満たしてくださったのです。キリストに向かう三人の博士を満たした喜びを今日は私たちが味わわなければなりません。「博士たちはその星を見て喜びにあふれた。」（マタイ2・10）中でも見習うべきことは、博士たちがキリストの足下に、捧げ物だけでなく自分たちの生命をも置いたことです。

この大聖年、教会はその子供たちとすべての人々のために、自らの役割をより決然と完全に果たす努力をしてきました。教会の役割とは、旅する三人の博士たちを正確に導いたあの星の役割と同じものです。教会は教会自体のためにあるのではなく、キリストのために生きているのです。教会が望んでいることは、「星」になること、つまりキリストに至る道を見い出せるよう人々を助ける指針を差し示すものとなることです。

教父たちはその神学で教会のことを好んで「月の神秘」と言い表しています。それは、教会が月のよ

うに輝くのが、教会自身の光によるのではなく、太陽であるキリストを反映することによるということを強調するためでした。また、第二バチカン公会議の教会憲章が次のような言葉で始まるのは喜ばしいことです。「キリストは諸民族の光である。」続けて公会議の教父たちは燃えるような望みをこう表します。「教会の顔に輝くキリストの光をもってすべての人を照らすことを切に望む。」（1）

月の神秘。大聖年のおかげで、教会はその召命を特に熱意を込めて生きることができました。教会がこの栄光の年に指し示したのはキリストです。ペトロの言葉をもう一度こだまさせながら指し示しました。「主よ、わたしたちはだれのところへ行きましょうか。あなたは永遠の命の言葉を持っておられます。」（ヨハネ6・68）

起きよ、光を放て。あなたを照らす光は昇り･･･

4　「すべての民は主に仕える。」キリストへ向かうという呼びかけが国々に行き渡るべきものであることが、大聖年の間に一層明らかにされました。全大陸、そしてあらゆる言葉を話す人々がこの広場に集まりました。（･･･）

もちろん、ここで行われた集いについてすべてを今お伝えすることはできませんが、いくつかの集いが思い出されます。大聖年の幕開けを祝うために集まった子供たちは、あり余る賛美の気持ちを示していました。熱意と誠実な証しによってローマを征服した若者たち。家庭を持つ皆さんは、現代に必要とされている信仰と一致のメッセージを示してくれました。高齢者の方々、病気や障害を抱える皆さんは、キリスト教的希望について雄弁に証してくれました。真理の追究に日々励む、文化や学問の分野に従事する人々が大聖年のために集まったこともありました。

2000年前の巡礼は生まれたばかりのキリストを探し求める東の国の三人の博士をベツレヘムに導きました。この大聖年にそれと同じ巡礼が何百万人ものキリストの弟子によって繰り返されたのです。「黄金、乳香、没薬」ではなく豊かな信仰を持って、あわれみを必要とする自らの心を携えてやって来ました。

5　以上のことから、今日（きょう）教会は、イザヤの呼びかけをもって歓喜します。「起きよ、光を放て。あなたを照らす光は昇り、....　国々はあなたを照らす光に向かい」（イザヤ60・1、3）この喜びの気持ちはむなしく成功ばかりを求めた結果ではありません。そのような誘惑に屈するなどということができるでしょうか。この特別な悔い改めの年が終わろうとしているのです。大聖年が与えてくれた素晴らしい機会とは、「記憶に残っている出来事の浄化」を行うことでした。そうすることで、2000年間の教会の子供たちの不忠実に対する赦しを神に求めたのです。

十字架上のキリストを前に、思い出したことがあります。教会を「聖」とするあふれんばかりの恩恵に反して、教会の子供たちは罪によって深い傷跡を残し、キリストの花嫁の顔に影を投げかけました。自己の高まりではなく、私たちの限界と弱さのためです。それでも、喜びに満たされずにはいられません。預言者が呼びかける内的喜び、感謝と称賛に満ちた喜びです。喜ばずにいられないのは、それが、受けた賜物に対する意識、またキリストの忍耐強い愛への確信に基づいているからです。

キリストにおいて御父と聖霊にも出会う

6　今度は未来に目を向ける番です。三人の博士の話は霊的な実りをもたらす確かな方法です。まず初めに博士たちが示すことは、キリストと出会ったら、立ち止まって、キリストと親しく付き合うという喜びを深く味わうようにならなければならないという点です。「家に入ってみると、幼子は母マリアと共におられた。彼らはひれ伏して幼子を拝んだ。」それ以来、博士たちの生命は永久に幼子に捧げられました。博士たちはこの幼子のためにつらい旅や人々の偽りに耐えてきたのです。（･･･）

キリストの御顔を黙想すると、その御目の中には御父の「姿」が見え、私たちは聖霊の愛によって満たされます。大聖年の巡礼によって、キリスト者の生命であるこの根本的な三位一体という側面が思い出されました。キリストにおいて御父と聖霊にも出会うのです。三位は源であり完成したものです。三位からすべてが始まり、すべてが三位へ戻って行きます。

しかも三人の博士たちのように神秘の黙想に没頭しても、旅をやめてしまうことなどありません。むしろ神秘を黙想することによって駆り立てられ、新たに始める新しい旅路の舞台で宣べ伝え、知らせて行くよう促されます。「別の道を通って自分たちの国へ帰って行った。」博士たちは最初の宣教者であるとも言えます。キリストとの出会いは博士たちをベツレヘムには留めず、この世で歩む道で新たな出発をさせることとなります。私たちもキリストから新たに始めなければなりません。それは、三位一体からの出発と同じことです。

7　兄弟姉妹のみなさん、これこそまさに、今日終わりを告げる大聖年の実りとして私たちに求められることです。

待ち受けるこの義務について記した使徒勧告「新しい千年期を迎えて」（仮題）に署名します。（教皇様はミサの前後の祝福を与える前に署名なさった。）この勧告には、キリスト教共同体が大聖年の出来事を後に新たな熱意をもって出発できるよう

くつかの考察を載せています。これはもちろん、短期間の内にさらなる企画を組織することを目指すものではありません。私たちは再び日常の生活に戻って行きます。それは、休息するという意味ではなく、むしろ、大聖年で経験した役に立つ教えを引き出すことが大切なのです。そうすれば、新しい義務に対して名案が浮かび、効果的な方向づけをもたらすこともできるでしょう。

教会がもっと聖なるものとして成長しますように

8 こういった考察をいくつかの地方教会に送りました。大聖年の「遺産」のようなものとしてそれぞれの司牧計画に取り入れてもらうためです。まず初めに急いでなすべきことは、イエス・キリストを眺めたいという望みに頼ることです。イエスについて黙想することは大聖年にもたらされた体験でした。マリアの子である人間の顔の中に、完全に神性と人性を備え、人となったみことばが認められます。東方教会、ローマ・カトリック教会両方において、偉大な芸術家たちが御顔の神秘をつかもうと懸命に試みてきました。けれども、聖霊こそが「御顔を描く方」であり、イエスを黙想し愛する人々の心に描く方なのです。私たちは聖霊降臨の時のように熱心に、そして新しい熱意をもって「キリストから始める」必要があります。何よりもまず聖性に対する日々の義務、つまり祈りやイエスの言葉を聞こうとする態度から始めることです。また、世界を前にして、一致、愛、証しを特徴とするキリスト者としての生活を送ることによって、主の愛を証明することが必要です。以上のようなことを使徒勧告「新しい千年期を迎えて」（仮題）で提案する予定です。その内容は「イエス・キリスト」という一つの言葉に集約できるでしょう。

私は教皇職を始めるにあたり、またこれまでに何度も、教会の子供たち、そして世界に向かって「キリストに広く心を開いてください。」と呼びかけてきました。大聖年の終わりに、そして新しい千年期の始めに、もう一度同じことを繰り返したいと思います。「キリストに広く心を開いてください。」

9 (･･･) 典礼の中で、また福音宣教をし、証しをしながら、地上を旅する教会は、日々天国の歌をこだまさせています。次の千年期に教会がもっと聖なるものとして成長できるよう主が取り計らってくださいますように。教会が歴史の中で、主キリストのあわれみと栄光の御顔を真実に表すものとなりますように。アーメン。 (2000.1.6)

キリスト者の一致

〔水曜日の一般謁見でのお話。聖体について第7回目の要理講話。〕

1 大聖年の企画として、エキュメニズムと他宗教との対話を忘れるわけにはいきません。このことは前にも「紀元2000年の到来」で指摘しました。（53、55参照）前回の要理講話で三位一体と聖体の輪郭が見えてきましたが、それによってエキュメニズムと他宗教との対話について深く考えるよう促されています。まず初めにキリスト者の間の一致を回復することについて考えましょう。エマウスの弟子について述べる福音書の言葉に照らされながら考え（ルカ24・13～35参照）、二人の弟子がたどった道、つまり一致から離れようとした二人が、駆り立てられて一致を再発見する方向へ引き返すという道を観察しましょう。

聖体によって一致する信仰

2 二人の弟子は、イエスが十字架に釘づけられた場所に背を向けました。イエスの十字架上の死は二人をひどく失望させるものだったからです。このため二人は他の弟子たちのもとから立ち去り、いわば自分本位の考え方へと戻って行ったのでした。「この一切の出来事について話し合っていた。」（ルカ24・14）この時、二人にはイエスが十字架に付けられた意味がわかっていませんでした。「散らされている神の子たちを一つに集めるために」（ヨハネ11・52）お亡くなりになったということが理解できなかったのです。二人が見たのは十字架の極めて否定的な場面であり、それによって希望が打ち砕かれたのです。「わたしたちは、あの方こそイスラエルを解放してくださると望みをかけていました。」（ルカ24・21）復活したキリストが二人に近づき共にお歩きになります。「しかし、二人の目は遮られていて、イエスだとは分からなかった。」（ルカ24・16）霊的な面から見ると、二人は暗黒の影に覆われていたからです。そのためイエスは辛抱強く、詳しく聖書を解説して、二人を信仰の光へ呼び戻そうとなさいます。「モーセとすべての預言者から始めて、聖書全体にわたり、御自分について書かれていることを説明された。」（ルカ24・27）二人の心は燃え上がり始め（ルカ24・32参照）、一緒にとどまるようにとこの不思議な同行者に頼みます。「一緒に食事の席に着いたとき、イエスはパンを取り、

賛美の祈りを唱え、パンを裂いてお渡しになった。すると二人の目が開け、イエスだと分かったが、その姿は見えなくなった。」（ルカ24・30～31）イエスが詳しく聖書を説明されたおかげで、二人は無理解の暗闇から抜け出し、信仰の光を受け、「パンを裂いてくださったときに」（ルカ24・35）復活したキリストを認めることができたのでした。

イエスと認めることができたこの意味深い変化によって二人は元気づきすぐに出発してエルサレムへ戻ります。そして「十一人とその仲間が集まって」（ルカ24・33）いる所に加わったのでした。信仰の旅路によって兄弟としての一致が実現したのです。

3（・・・）トロアで、「パンを裂く」パウロの周りに信者が集まっていたことについて、ルカは次のように語っています。このような集まりは、使徒の長い話で始まりますが（使徒言行録20・7）、話の内容は信者の信仰、希望、愛を育むことが目的だったことは間違いありません。ルカのこの説明によって、信仰の一致は人々とともに聖体にあずかるための必要条件であることがはっきりします。みことばの典例と聖体に関連して、第二バチカン公会議は聖ヨハネ・クリゾストム（「説教」４６）を引用し、思い出させてくれることがあります。「信者は司教と一致して、受肉し、受難し、栄光を受けたみことばである子を通して、聖霊を注がれ、父なる神に近づく。こうして信者は『神の本性にあずかる』（２ペトロ１・４）ものとされ、いとも聖なる三位一体との交わりに至る。したがって、これらの個々の教会における主の聖体祭儀によって、神の教会が建てられ、成長し、また共同司式によってそれらの教会の交わりが示される。」（「エキュメニズムに関する教令」１５）神的一致の秘義とのつながりは、みことばと聖体という一つの食卓につく人々の間に、一致と愛の絆を生み出します。一つの食卓というのは、一致を記し表すものです。「こうして聖体拝領は、教会としての完全な交わりと、その目に見える表現から切り離すことができない。」（「エキュメニズム新指針」129）

4 この教えによって次のことが分かるでしょう。つまり様々な教会や教会共同体として集うキリストの弟子の間に教理面の違いがあるがために、完全に秘跡を分かち合うには限界があるということです。けれども、分裂はあるにせよ、洗礼という基本的な一致を示す深い根によってキリスト者は皆結びついています。したがって、いまだ分かれているキリスト者は、同じ聖体に参与することはできないといっても、「エキュメニズム新指針」に書かれているいくつかのしるしを尊重することはできます。いくつかのしるしとは、すでに存在する一致を示していること、また、みことばと主の御体と御血の食卓の周りで、諸教会の完全な一致へ向かっていることが示されていることです。そのような態度があれば、「例外的に、正当な理由があれば、教区司祭は、他の教会あるいは教会的共同体に属する人がその場合に朗読（聖書朗読）することを許してよい。」（133）同じように「必要に迫られ、あるいは霊的な利益がまぎれもなく期待され、また誤解あるいは無関心主義を招く危険がないならば、」赦しの秘跡、聖体拝領、病者の塗油はカトリック教会と東方教会の間で、互いにあずかることができます。（123～131参照）

教会の旅路を支える神のパン

5 とはいえ、一致の木は最大限に至るまで成長しなければなりません。このことは、キリストが高間の祈りの中で強く願っていることであり、ここでお話を始める際に宣言したことでもあります。（ヨハネ17・20～26、「エキュメニズム新指針」22参照）御言葉と聖体の食卓における交わりに限界があるという事実は、清め、対話、教会一致運動の進展を呼びかけるものとなるべきです。こういった限界は、聖体祭儀のとき、分離と矛盾の重さをさらに強く感じさせるものです。ですから聖体は、教会の中心にある挑戦と呼びかけであり、キリストの強い最後の願いを思い起こさせるものです。「すべての人を一つにしてください。」（ヨハネ17・11、21）

教会は分裂した、苦しむ人々で成り立つ体であってはなりません。教会はエリヤの旅で示された神のパンによって支えられ、前に向かって進む強い生きた有機体であるべきです。（1列王記19・1～8参照）神との絶対的な出会いという頂点に向かって前進しなければなりません。その頂点で、ついには啓示の光景を目にすることとなるでしょう。「更にわたしは、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために着飾った花嫁のように用意を整えて、神のもとを離れ、天から下って来るのを見た。」（ヨハネの黙示録21・2）　（2000.11.15）

「教皇様の聲」　ヨハネ・パウロ二世教皇の説教、書簡、講話等を解説なしにそのまま伝える月刊紙
■毎月10日発行　■**定価**：送料とも一部186円　■**年内定期購読**：送料とも一部2,087円（税込）
詳しくは、精道教育促進協会までお問い合わせ下さい。
財団法人■精道教育促進協会 〒659-0093兵庫県芦屋市船戸町12-6 TEL. 0797-34-5920
FAX. 0797-34-4920振替口座：01130-8-72393 財団法人 精道教育促進協会
＊電話受付時間は月・火曜日午前9：30～11：30、水曜日午後2：00～午後5：00、
木曜日午後1：30～5：00となっています。

使徒書簡
「新しい千年期を迎えて」（仮題）抜粋

（・・・）皆さんの手引きと励みとして、司牧的優先事項をいくつか指し示したいと思いますが、その内容は大聖年の体験によって明るみにされたと思われることです。

聖性

30　まず初めにはっきりと申し上げたいことは、どんな司牧的イニシアティヴであっても聖性と結びつけて始められるべきだということです。これは大聖年の免償の究極的な意味ではないでしょうか。洗礼を受けたすべての人の生命が清められ、徹底的に新しい者となるためにキリストによって特別な恵みが与えられたのです。

私が望んでいることは、大聖年に参加した人々の中で、多くの人がキリストの恵みから恩恵を受け、その恩恵による要求に気がつくということです。大聖年は終わり普通の日々が始まりますが、聖性を強調することはこれまでになく急がれる司牧的仕事であることがわかっています。

したがって、教会憲章についての教義憲章第5章がもつ実践的な意義を十分に再発見する必要があります。この文書が宣言することは「聖性への普遍的な呼びかけ」です。公会議の教父たちはこの点について次のように強調しています。つまり、聖性への呼びかけを、単に教会論にくっつけた単なる霊的な飾りではなく、教会の教えに固有かつ本質的な面とすることです。秘義としての教会、言い換えると「父と子と聖霊の一致に基づいて集められた」（「教会憲章」４参照）ものとして教会を再発見すると、同時に教会の「聖性」が再発見されることとなりました。教会の「聖性」は本質的に聖であり「三重に聖」（イザヤ6・3参照）である方のものであるという根本的な意味において理解されています。教会が聖であると宣言することは、教会がキリストの花嫁であることを指し示しています。というのも教会を聖とするためにキリストがご自身をお与えになったからです。（エフェソ5・25～26参照）このいわば客観的な聖性という賜物は洗礼を受けたすべての人に与えられています。

一方で聖性という賜物は一つの課題となります。生涯をかけて成し遂げるべき仕事です。「実に、神の御心は、あなたがたが聖なる者となることです。」（1テサロニケ4・3）これは一部のキリスト者だけの義務ではありません。「すべてのキリスト信者がキリスト教的生活の完成と完全な愛に至るようめされている。」（「教会憲章」40参照）

31　一見したところ新しい千年期を始めるにあたって、全キリスト者の聖性という根本的な真理を司牧計画の基礎として考えることは非現実的なことのように思われます。聖性の計画を立てることなどできるのでしょうか。司牧計画の中で「聖性」という言葉にはどんな意味があるのでしょう。

事実、聖性という表題のもとに司牧計画を設置することは重要な選択です。洗礼とは、キリストとの一致、そして聖霊が入り込むことによって神の聖性の中に実際に入っていくことですから、倫理の要求を最小限度で妥協したり、浅い信心しか持たない中途半端な生活に甘んじることと相入れないのははっきりしています。「洗礼を望みますか。」の言葉は同時に「聖人になることをのぞみますか。」ということを問うています。つまり、洗礼を受けようとする人に、山上での説教の根本を示しているのです。「あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全なものとなりなさい。」（マタイ5・48）

完全さという理想が、何か特別な生き方に関するもののように誤解されてはならないと公会議は示しています。少数の聖なる「非凡な英雄」たちが獲得するもののように考えてはならないのです。聖性への道はたくさんあり、一人一人の召命によって異なります。主に感謝したいことは、この数年間に多くのキリスト者を列福し列聖できたことです。その中には、普通の生活を送りながら聖性を達成した信徒がたくさんいました。すべての人に心から次のことを再提案する時が来ています。つまり、普通のキリスト者の生活にこのような高い基準をもうける時がきているということです。キリスト教共同体やキリスト者の家庭は、このような方向に向かって行かなければなりません。しかしながら、聖性への道は個人的なもので、それぞれに適した本物の「聖性における訓練」が求められるのもはっきりしています。この訓練は次のようなもので支えられるべきです。つまり、個人・集団的援助によって伝統的にすべての人に与えられる源泉、また教会に認められた組織や運動において提供される新しい形においても支えられなければなりません。

祈り

32　聖性へ向かう訓練には特に「祈る術（すべ）」を備えた

キリスト教的生活が必要とされます。大聖年は、一人ひとりが、また共同体も、さらに集中的に祈りを行った年でした。しかし祈りというのはできて当たり前というものではありません。習わなければならないのです。使徒たちが、「主よ、わたしたちにも祈りを教えてください。」（ルカ11・1）とお願いしたように、改めて神である主ご自身からこの祈りを習いましょう。このキリストとの対話のうちに繰り広げられる祈りにおいて、神と親しくなるのです。「わたしにつながっていなさい。わたしもあなたがたにつながっている。」（ヨハネ15・4）この依存関係こそは祈りの礎そのものであり、キリスト者の生活の核心を成すものです。そして、あらゆる司牧生活が本物であるための条件です。この依存関係は、御父の御顔を眺めるためにとキリストによってキリストのうちに私たちにもたらされ、聖霊によって実現されます。キリスト者の祈りにおけるこの三位一体の論理は、何よりも教会の生命の頂点であり源である典礼において学ぶことができます。（「典礼憲章」１０参照）しかしまた、個人的な体験においても学び生きることこそ真に生きたキリスト教の秘訣です。キリスト教の本質的な点は、将来に対する恐れを抱かないことです。絶えず神なる命の源泉に立ち戻りそこにおいて再生するからです。

33　今の世の中で、教育と宗教の分離が広がっているにも関わらず、多くの場所で霊性への強い要求が、祈りへの新しい必要性としてあらわれていることは、時のしるしの一つではないでしょうか。他の宗教は、現在、昔からのキリスト教国に広まっていますが、祈りの強い要求に対して独自の方法で応えています。そして、その方法は時には非常に魅力的なものです。けれども、御父を示す方・世の救い主キリストを信じるという恵みを受けた私たちには、キリストとの深い関係がどれほどの深みまで進み得るかを示していく義務があります。

東方、西方両教会の霊的な伝統は、この点について多くのことを教えています。両教会が示していることは、愛の純粋な対話である祈りによって、いかにしてキリストに完全に夢中になり、聖霊に触れられて揺り動かされ、子供として御父の心の中で憩うかを示しています。これは、キリストが約束なさったことの生き生きとした体験です。「わたしを愛する人は、わたしの父に愛される。わたしもその人を愛して、その人にわたし自身を現す。」（ヨハネ14・21）これは、まったく恩恵に支えられた道ですが、同時に熱心な霊的努力が必要で、苦しい浄化を避けることもできません。（「暗夜」）しかし、いろいろな方法で神秘家たちが体験した「霊的な婚姻」のような、言葉では言い表せない喜びに導く道でもあります。このようなことを考えると、多くの輝かしい模範の中から、十字架の聖ヨハネやアビラの聖テレジアの教えを思い出さずにはいられません。

そうです、兄弟姉妹の皆さん、私たちのキリスト教共同体は本物の祈りの「学校」とならなければなりません。そこでのキリストとの出会いは、助けを求めることだけではなく、感謝、賛美、礼拝、観想、そして耳を傾けて聞き入る熱心な信心にも現われ、ついには心が「愛に陥る」ところまで進みます。しかし、熱心な祈りによって歴史に対する責任から逃げるわけではありません。神の愛へと開かれた心は、兄弟姉妹への愛にも開かれ、神のご計画に沿って歴史を形作ることができるようになるのです。

34　特別な奉献生活への召命という賜物を受けたキリスト者は、当然特に祈るよう求められています。そのような奉献は、本質的に観想を体験するよう更に開かれており、特に注意して黙想を深めなければなりません。とはいえ、普通のキリスト者は形だけの祈りで十分であり、生活を祈りで満たすことなどできない相談だと考えるの間違っています。特に現代のように様々な形で信仰は試され、人々が単にいい加減なキリスト者というだけでなく「危険にさらされたキリスト者」となっているときにはなおさらです。信仰がだんだんと弱まり、いずれは「代用品」の魅力に屈してしまったり、他宗教の提案を受け入れ、こじつけの迷信に身をゆだねることにもなりかねません。

したがって、祈りの教育が何らかの方法で司牧計画の最重要項目になることが必要です。私は水曜日の要理講話で詩編の考察に取り組むことにしました。朝の祈りの詩編から始めます。教会のこの公的な祈りを日々の指針にするよう努めています。奉献生活をする共同体だけでなく小教区においても祈りの雰囲気が確実に広まるよう手段を講ずるなら、何と役に立つことでしょう。そのためには、適切な洞察力をもって大衆信心に適切な地位が与えられること、人々が特に典礼的な祈りにおいて教育されるようにすることです。司牧生活の様々な形態や社会における証しと、聖体祭儀や朝の祈り・夕方の祈りを結びつけることは、キリスト教共同体の普通の生活にとって、私たちが想像する以上に実現可能なことと思われます。熱心なキリスト教集団、多くの信徒からなる集団の体験がこのことを証ししています。

（続いて「日曜日の聖体祭儀」「赦しの秘跡」「恩恵の優位」「みことば」についての考察が続きます。）